

ナマステ



特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌

126 号

2016 年 12 月 10 日発行号

冬になったのだけれども。

11 月 24 日。東京では 1962 年以來 54 年ぶりとなる積雪を観測しました。小菅村では、20 cm の積雪で雪履きもしました。12 月 10 日現在、日陰に少々残ってますが、普通の 12 月。むしろ、積雪を経験した後では、暖かい冬に感じています。慣れるってことは強くなるってことかもしれませんね～（内容によるけれども）。



まだ預かり中！！

こすげ冒険学校の忘れ物です。心

当たりある方は、事務局まで！！

活動報告

その 1 「タイ環境学習キャンプ」 報告

8.13～23

○はじめに

前号のナマステでも記事が載っていましたが、2016 年 8 月 13 日～23 日にかけて、タイ環境学習キャンプに同行してきました、賛田隼人（だにえる）です。自分はそもそも海外に行くのが初めてで、10 日間の衝撃の連続でした。本当に楽しいこと、面白いことだらけで、行ってよかったなと思いました。10 日間の行動をすべて書き出しても冗長かなと思うので、活動記録というよりは、タイでのことをいくつかの項目に分けてお伝えしようかと思います。これを読んだ人が、少しでも興味を持って、一歩踏み出してもらえたらと思います。

○パンダキャンプのこと

タイでの 10 日間の中でも、特に心に残っているのがパンダキャンプでの生活です。キャンプという名前が付いているけども、テントでの野営ではなく、小菅のキャンプ場にあるログハウスをもう少し簡素にしたようなバンガローで寝泊まりをします。シリボンさんがやっている、『ファミリーフォレスト』の活動なんかで使われているそうで、タイの自然が詰め込まれたキャンプ場です。日本の真夏くらいの気候なタイでも、ここの朝晩は半袖だと涼しいと感じるくらいで、本当に快適です。



バンガロー



クモ



前回の会報の発送で、「こすげ冒険学校 修了証」の同封を逃していました。
何やってるんだ事務局！！ 誠に申し訳ありません・・・。

バンコクでの交通量や人の多さを味わってから、ここに来るとほっとした気持ちというか、落ち着くなという気がするのはなぜでしょうかね。小菅のキャンプ場での生活があまり苦にならない人なら、本当に快適に過ごせる場所だと思います（トイレも水で流せるタイプだし）。密度高く生えた竹だとか、バナナの木、タイで自生している多くの植物が植えられていて、日本の庭や家庭菜園と比べてしまうと圧倒的で、歩きまわるだけでも楽しいです。植物が多ければ、そこで生活する生き物も多く、ヤモリやリス、ホタルなどを目にすることができました。トッケイヤモリという大型のヤモリも生息しているようですが、鳴き声も姿も確認できなかったのが心残りです。

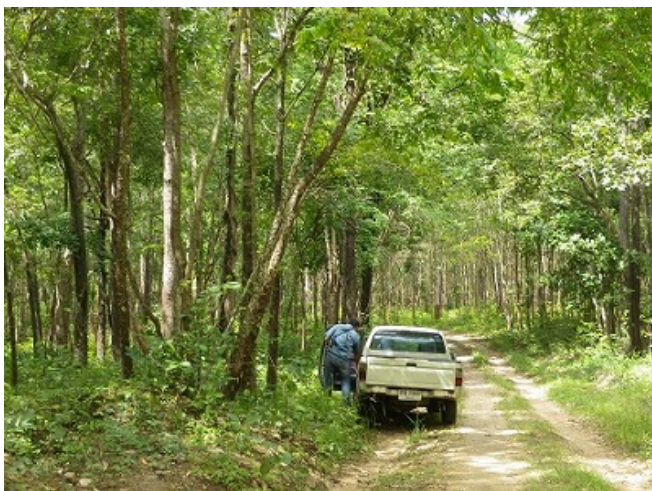
動植物も素晴らしいですが、パンダキャンプでの食事もう素晴らしいかったです。カレンさんやおばちゃんを用意してくれるご飯は、お店で出てくるようなものとは違った、タイの美味しい家庭料理でした。しかも、我々のことを考えてくれて、辛さが抑え目なのが多うれしいところです（でも油断していると普通に辛かったりしたけど）。食事だけでなく、食後に出してくれる果物も毎回違ったものを用意してくれて、いつも楽しみでした。

ごみさん、ごめさんがタイの小学生や大人相手にワークショップをするお手伝いなんかもしたけれど、パンダキャンプで一番衝撃的だったのは土の中にいたクモ。掘り出したノイさんにも驚きだけど、クモのサイズが大きいこと大きいこと。獲ったあとに食べるぞとか話していたけど、結局食べる事が無くてよかった…。

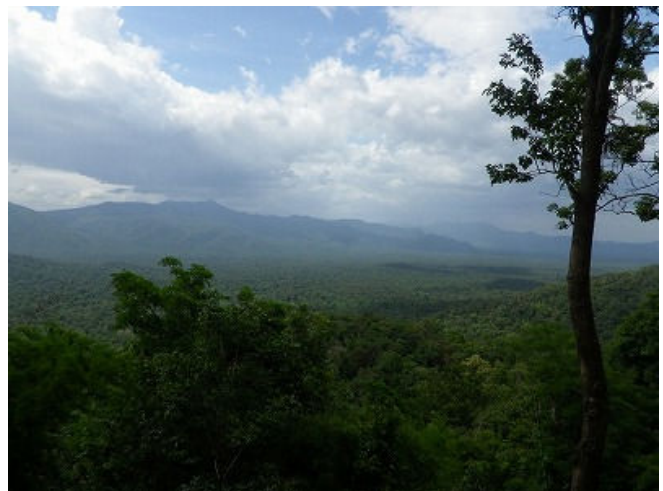
○ファイ・カ・ケン野生生物保護区のこと

パンダキャンプからさらにピックアップトラックに長いこと揺られていったのがファイ・カ・ケン野生生物保護区。「タイ最大で最後の原生地域」なんて称されることもあるみたいです（キャンプから戻ってから知りました…）。とにかく、そう呼ばれるにふさわしい、広大な森林地帯がファイ・カ・ケンです。普通は、ここで働くレンジャーや、動植物を調査する研究者の人でないと立ち入りが出来ない場所です。それを、現地の方に同行してもらうことで、観光や旅行では絶対に辿り着けない場所に行くことができるというのがこのタイ環境学習キャンプのすごいところの一つかなと思います。

ファイ・カ・ケンに行った初日は、観察塔という建物でひたすら双眼鏡をのぞいていました。運がいいとトラやゾウなんかを通るみたいなのですが、この日は現れず、代わりにクジャクを観察することができました。野生のクジャクという言葉がなんだかもう変な感じがしますが、動物園なんかで見かけるクジャクと違って、野生のクジャクの尾は引きずらない程度の長さなんだな、やっぱり野生だと抜けたりしちゃうのかなと思っていたのですが、一般的なイメージのクジャクはインドクジャクで、僕らが見たのはマクジャクなのでそもそもが間違っていたみたいです（書いていて恥ずかしい）。その後は研究者用のバンガローに行き、10時の消灯時間まで食事やお酒で盛り上がっていました。



ファイ・カ・ケンの道



ファイ・カ・ケンからの眺望

次の日は朝から出発して、保護区の中のもっと奥へと向かいました。自然をなるべくそのまま残すという意味もあるのだと思うのですが、舗装されていない道をピックアップトラックで延々と走っていくというのがもうワク

ワクして、楽しくてたまりません。野生生物を見逃さないように、ゆっくりと進んでいき、写真を撮ったりするために時折止まったり。そんな風に時間を贅沢に使って奥地まで進んでいき、きつい坂道を強引に車で登り切って、最後は少しだけ自分の足で登っていくと、見渡す限りの原生林に出会いました。地平線まで人工物は何もない景色に圧倒されてしまいました。タイにいる間、何度か山がすごい遠くにあるな、日本ではこんなことないよなと思うことはありましたが、この景色は別物でした。はるか遠くに見える山まで延々と広がる森にため息しか出ませんでした。

直接目にはすることは出来なかったのですが、道の途中、ゾウがいた形跡をいくつか目にすることができました。それは道に落ちていたゾウの糞だったり、なぎ倒された竹や木だったりですが、確かにファイ・カ・ケンで生きる動物たちの気配が感じられるものでした。もし、また行く機会があれば会いたいと思う反面、ゾウやトラに出会ったら命が無事で済むのかなと思うと怖いなとも思ってしまうのでした。

○食事のこと

タイの食事は、基本的に甘いのか辛いのかです。あとはあまり味が付いていないという場合もあります。というのも、ご飯を食べるところの多くで、ナンプラーやお酢、唐辛子なんかが置いてあり、自分で好みの味付けにして食べるという感じになっているからです。出された食事に対して、食べる前から調味料をかけるというのはなんとなく抵抗がありますが、タイでは普通のことのようでした。

パンダキャンプでの食事は辛さ控えめで美味しかったのですが、他の飲食店は容赦なく辛いことがあって、文字通りの刺激に溢れた食生活でした。特に刺激的だったのが、コーヒーショップで食べたペペロンチーノ。日本でも本格的なものは結構辛いことがあるのだから、想像力を働かせればよかったのかもしれませんが、この時はそんなこと考えもしませんでした。お腹を空かせて待っていたところに来たのは、スライスではなく、砕いたのかなという感じのごろっとしたニンニクと、5 本は優に超えた数の唐辛子が入ったペペロンチーノでした。とても美味しかったのですが、本当に刺激的でした…。タイでの食事は覚悟が必要ですね。

他にも、もち米に練乳みたいな甘い液体をかけたものとか、果物に砂糖をつけて食べるだとか、衝撃的なことも多かったのですが、なによりも自分の中で衝撃だったのは、ドリアンがとてつもなく美味いということです。タイに行くまでは、見た目も匂いも食品のそれではないと思っていたので食べたことがなかったのですが、郷に入っては郷に従えということもあり、勧められるがままに食べてみたところ、1 回目は匂いが気になりつつも味は悪くないな、2 回目は匂いにも慣れて美味しく感じ始め、3 度目には自分から食べに行くようになってしまいました。やはり、その土地のものをその土地で頂くと格別に美味しく感じますね。ドリアンに苦手意識がある人でもタイの市場で見かけたら是非挑戦してほしいと思います。匂いが嫌な人は少し硬めのものを選んでもらうと食べやすいと思います。

○言葉や文化のこと

タイでの 10 日間のうち、その半分くらいをタイで日本語の勉強をしているガオという青年とともに過ごしました。ガオ君の日本語は、日本でも十分通用するレベルで僕から彼に教えてあげられることは少なかったのですが、彼からはタイのことやタイの言葉を色々教えてもらいました。タイのあいさつは「サワディ カップ」、ありがとうは「コップン カップ」です。あいさつ等くらいはしっかりできるようにしておこうと思い、ガオ君に色々と尋ねたのですが、そこでいくつかびっくりすることがありました。まず、「いただきます」とあたる言葉がないこと。タイの人は料理が出されたら、お店の人にお礼は言いますが、みんなでそろって食べ始めるといふ雰囲気はありません。出された料理にどんどん手を付けていきます。「御馳走様でした」もありません。「日本は（いただきますとか言うってから食べることが）変だよ。」とガオ君は言っていましたが、僕は日本の、食材にも作ってくれた人にも感謝を示す文化が好きです（20 年以上続いているから染み付いているだけかもしれませんが）。それともう一つ、「おやすみなさい」にあたる言葉もタイにはありません。もしも言うとしたら、とガオ君が教えてくれたのは「ファン

ディー」というタイ語でした。「良い夢を」という意味だそうです。これはこれでいいかもしれないと思い、タイでは使っていました（何度もガオ君に発音を直されましたが）。

若林夫妻や、シリポンさんたちと話をするのも、もちろん興味深く楽しかったのですが、やはり年の近い人と話すというのは気安く、色んな話もできてよかったです。タイの人の仕事に対する価値観や考え方といったことから、日本の音楽やアイドルといったことまで、色んな話ができて楽しかったです。でも、NMBはおろか、AKB も大して詳しくなくてごめんね、ガオ君…。まさかアイドル好きのタイ人と一緒に行動するとは思ってなかったんだよ…。

○お金というか買い物のこと

※ 1 バーツ≒3 円

タイで過ごして、食事の安さに感動しました。大学の食堂でならば、35～50 バーツあれば一人前の食事が手に入ります。スーパーマーケットなら、水が8 バーツくらい、ビールは39 バーツくらい。日本では本当に考えられないくらいの安さです。特にビール。あとフルーツも1 キロあたり50 バーツとかで買えるので安かったですね。サンダルやTシャツといった衣料品は日本でも安いものも多いので、特別安いという気はしませんでした。とはいえ、サンダルは快適だったのでいい買い物をしたと思いますが。渡し舟のお代も3 バーツだったので、タイでもっと長く生活することがあればもっと物価の安さを感じるシーンも増えたのかなと思います。

買い物に関してもう一つ、チャトチャというバンコクにあるマーケットのことです。週末にだけやっているそうなのですが、とにかく広くて店の数や種類が豊富で、服やアクセサリ、電子部品や木工品、家具なんかも置いてありました。吉祥寺のハモニカ横丁のような細い道と所狭しと並んだ店が、1 キロ四方くらい（実際には長方形っぽいのですが）ひたすら続くのは歩きまわるだけで楽しさがありました。探せば、大抵のものはここで手に入るの、お土産はここで買うのがいいかもしれないですね。ちなみに、僕はここでシンハーとチャングというタイのビールの柄のTシャツを買いました。もう観光に来た日本人丸出しでした（笑）。



アンチャンの花



大きな木（日本だとサシマスオウの木かな？）

○おわりに

タイでのことを全部書き出したら、冗長になるからと思って項目別にしたのはすなのに、それでも冗長になってしまいました…。それだけ、タイでの活動が充実していて、感じたことがたくさんあったと思って勘弁してください。

タイ環境学習キャンプは、行って損をしたということは絶対にないので、ちょっとでも興味があれば是非。気になることがあれば僕やごめさん、ごみさんに。

では、ここまで読んでいただいてありがとうございました。

（贅田）

その2 「こすげ冒険学校 後記」 その2

8.4~10

こすげ冒険学校 村長 雫 永法

今回は、焚き火という点から子どもたちの様子を報告しました。日程的には初日、二日目のことです。今回はその後の様子をお伝えできたらと思います。

今年の冒険学校も二日目辺りから子どもたち同士の距離が急速に近くなっていく様子が見られました。それは、薪作りや焚き火だけでなく、沢遊びと五右衛門風呂（沢の水は冷たく体が冷えてしまうのでお風呂で暖をとってからまた沢で遊ぶ）、キャンプ場を出て下流の浅瀬でカジカ（清流に生息する魚）突き、それぞれが自分の寝床をつくって満天の星空を眺めながら雑魚寝等、子どもたち同士が場所と時間を共にしながら自然を楽しむ機会が目白押しだったからでしょう。また、食事一緒に食べるということも大きく関係していたのかもしれません。



大人は大人で好きなことをしていたということも大切だなと感じます。もちろん、子どもが命に関わるような危険なことをしていないかどうかということを見極めつつ見守りながら、一方で自分が面白いと思うことをしているのです。豪快に薪割りを楽しむ大人。偶然に目の前に現れた昆虫の写真を撮り図鑑で種類を特定し大喜びする大人。ハンモックを持ち出して昼寝を楽しむ大人。黙々と木を削って何かを作っている大人……。大人が自由な発想で思い思いに楽しんでいると、子どもは子どもで自由に動き始めるのです。

この大人も子どもも関係ないゆったりと自由な雰囲気冒険学校の魅力なのかもしれません。今年はテントを抜け出してログの柱とブルーシートを利用して屋根を張り、荷物を運び込んでいる子どもたちが現れました。『おっ、面白そうだな〜』と遠巻きに見て

いると中で何やらごそごそと作業しています。どうやら自分たちだけの寝床？を設営しているようでした。子どもたちは「ここ、俺たちの部屋。な〜。」「な〜。」と目を合わせて自慢気に教えてくれました。



大人からするとシートを上につただけのただのスペースに見えるのですが、子どもにとっては極上のプライベートルーム。食事もそこへ持ち込み、とても満足そうに利用していたり、ヒソヒソと楽し気に談笑していたり。子どもたちには子どもたちの世界があるのだなと改めて感じました。・・・二日もすると此処は何かの動物の巣かと思うような様相を呈してくるのですが・・・これもまた冒険学校の醍醐味。後片付けも自己責任。

話が逸れましたが、このプライベート空間で子ども同士のトラブルが起りました。それぞれの言い分や要望をお互いに受け入れられずの喧嘩。大人は、一応話は聞くがそれ以上は関知せずそれぞれに任せていました。しばらくは冷戦状態が続いていたようですが、時間の経過と共に解決の方向を見つけたようでまた笑顔で遊んでいる様子が見られました。

冒険学校に参加する子どもたちは出身も様々です。年齢も生活地域も違います。豊かな自然環境の中でゆったりと自分を出し合い、時にはぶつかり合いも経た上で受け入れ合って共に生活を創りあげていきます。ある意味、文化交流の場なのだなと思いました。

そして、『小菅村の自然の中で楽しみを見つけ』ながら『他者と共に生きていくとはどういうことなのか』を学び合う場でもあるということ、この何気ない寝床作りという出来事から改めて感じました。(続)

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20 年⑤

10 月に TJ クラブ(タイ・日本ネイチャークラブ)を中心としたラジャバト・プラナコン大学の環境教育の先生方と大学院生が 7 名来日した。ゴミさん(中込貴芳)、クロ(黒澤事務局長)、私(中込卓男)の 3 人で夜 9 時過ぎに羽田空港に自家用車で出迎えに行ったことから始まった一週間であった。船木民宿を貸切り、前半は小菅村の環境・文化を知るプログラム。小菅村の船木直美村長はじめ、青柳諭さん、木下善晴さん、木下稔さん、亀井雄次さん、守屋アキ子さん、広瀬屋旅館さん、いろいろな方々にお世話になり、楽しく満足のいく体験ができた。後半は池袋に宿泊し、博物館等を見学した。プニポン国王がご逝去されたニュースも入りいろいろあったが、贅田くん(だにえる)、ゴミ、ゴメで最終日の案内をし、羽田空港まで見送った(詳細はいずれ、どこかで)。

今回の連載は世界遺産ファイカーケーン野生生物保護区での、今までの探検活動の中で 3 本指に入るディープな体験を紹介する。 中込 卓男



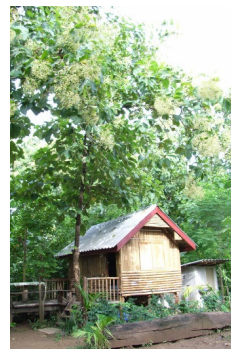
▲10 月、ラジャバト大学のみなさんと小菅村の方々と昼食会(この時は、タイ料理づくり)。

タイの鳥 III

若林 卓司 日記より

2007年8月20日

午後 1 時にラーチャバット・プラナコン大学のホテルに着く。ゴミさん(中込 貴芳)、ゴメさん(中込 卓男)、初顔合わせの武藤さん、それにチンタナー先生がロビーで待っていた。1 時過ぎに迎えのアドゥンさんが来て、チンタナー先生の見送りを受けてウタイタニーに向けて出発した。今回もスパンブリーの「100 年市場」に立ち寄った。バンコクは朝から晴れた暑い天気だったが、ウタイタニーに近づくにつれて、雲行きがおかしくなり、とうとう強い雨が降り出した。雨季に雨が降らないように望むのもおかしいもののだが、バーンライのシリボンさんのパンダキャンプでは去年と同じようにテント生活をせざるを得ないと思っていたので、強い雨は降ってほしくなかった。1 年ぶりのパンダキャンプはさらに木々が大きくなり、去年の敷地を流れる川の氾濫のために橋が流されていた。シリボンさん、今回世話になるアドゥンさん等と夕食をとりながら歓談する。パンダキャンプには宿泊施設が 2 棟できていて、テント生活の危惧はなくなった。



8月21日

9 時ごろシリボンさんの奥さんのポータンさんの車で近くにあるブドーン小学校へ行く。幼稚園を合わせて全校生 42 人の学校で、今年はゴメさんのクラスの学生が小遣いなどを貯めた 7 千バーツ(1 バーツ=約 3 円)近いお金を寄付した。ポンティップもサッカーボール、バレーボール、それに空気入れを寄付した。理事長が代わっていたが後の先生三人は去年と同じだった。全校生の食費 1 日 200 バーツをまかなうための予算がないので、寄付や畑にトウモロコシを植えて売るなどしていろいろ工夫されていた。幼稚園ではち

ようど数字の勉強をしていたのでゴメさんが一緒に入って園児と肩を並べていた。



いったんパンダキャンプに戻り、今度はシリポンさんの運転でオンアートさんの有機農業を見せてもらいに行く。国王の「知るを足る」農業を実践しているのだ。陸稲を植え、ザボンを栽培し、ニワトリを飼い、魚を養殖し、奥さんは空いた時間を機織りに使っていた。肥料は自前でトウモロコシなどの残りを使って作っていた。また、木炭なども自分で作っていた。お土産にザボンをいくつももらった。



昼からはアドゥンさんにシリポンさんが職業学校の環境教育の短期コースの実習に使っているモーターチャイ自然トレイルへ連れて行ってもらった。ここは昨年、カレンの人に案内してもらった記憶があるが、トレイルを新しく作り直したという。先に来て待っていた森林局のフーンさんに先導してもらう。去年、フーワイカーケーンの管理事務所側に行ったとき会って、いろいろ経歴は聞いているのだが、今回、自然に関する知識がただ者じゃないことがよくわかった。薬になる草木の類をいろいろ教えてもらった。また肉桂の樹皮を削ってその香を嗅がせてくれた。これからシナモンを作るという。鳥に関しても声を聞くだけで的確に種を言い当てることが出来た。明日からフーワイカー

ケーンで案内してもらおうのだが、これは楽しみだと思った。

夕方日本組みはマッサージにバーンライの町に出かけたが、私とポンティップは市場などをぶらついた。ここでイエスズメを見た。スズメと混じるようにして生活していた。スナックのかけらが落ちていたが、スズメがそれを拾ったが、イエスズメのオスがそれを奪い、さらにイエスズメのメスが奪い取った。これがどういうことか私には判断しかねるが、イエスズメがスズメに遠慮しているのではないことはわかる。パンダキャンプにもどって夕食をとる。ここでの食事は主にアドゥンさんが奥さんの協力で作っているという。アドゥンさんも奥さんもシリポンさんの生徒だと聞いている。シリポンさんは学校の方が忙しらしく私たちの世話が十分にできないことを悔やんでいたが、そのぶんボタンさんとアドゥンさんがいろいろやってくれた。日本の3人組みは呑み助ばかりだが、シリポンさん、アドゥンさんもけっこういける。夜は遅くまで話をしたが、シリポンさんが去年の顕微鏡（レーベンフックのガラスビーズを利用した簡易顕微鏡）の反響を話してくれた。話は大きくなって、5チャンネルの「緑の世界」という5分ほどの番組だが、パンダキャンプの活動も含めて4回連続で放映されたという。私たちはそのビデオを見せてもらった。

8月22日

昨日の夜の話で校内に自然トレイルを作って環境教育をしている学校の話聞いた。その時私たちは即座に見学したい由を言ったので、シリポンさんが連絡を取ってくれて、朝、ボタンさんの運転でバーンライ・ウィッタヤー中等学校を訪問した。最初に理事長室で環境教育の概況を聞いたり、担当の先生を紹介してもらった。それから校内にある自然林に案内してもらった。トレイルのあちこちに生徒が待っていて簡単な説明をしてくれた。



パンダキャンプに戻るとすぐにフーウィカーケーンに行く用意をした。今回はフーウィメーディーへ行くのだ。フーウィメーディーはバーンライの北 20 キロぐらいのところにあり、谷間にあるカレン族の集落を越えていく。最奥のカレンの集落は広い谷間にあり、陸稲ばかりでなく水田もあった。



ここまでの道は一部工事中で道を拡張しているところもあった。悪路とはいいいかねるがピックアップの荷台に乗ったゴメさんと私はラテライトの埃を浴びて赤紫に染まってしまった。車はアドゥンさんの運転する 4 輪駆動だったが、ここから真の威力を発揮した。フーウィメーディまで残すところ 2 キロほどだったがゴメさんと私は荷台に立ち上がって過ぎ行く森の景色を楽しんだ。途中で数頭のタイ語でリン・ウォーク (Rhesus Macaques) というサルを見た。目的地に着くと同時に 1 羽のワシを見た。カワリクマタカ (Changeable Hawk-Eagle) の若鳥だった。さっそくフーンさんの出迎えを受けた。池の畔にサイの木があって、実がなっていた。そこにハシブトアオバトやシロボシオオゴシキドリ等が集まっていた。昼食をとり、宿泊所に荷を置いてから、20 キロ近く奥にカオバンダーイというところがあるのだが、そこへの道を 2 キロほど歩いた。



辺りは竹を含む雑木林が覆っている。途中で何度もフーンさんに動物の足跡の説明を受けた。ちょうど雑木林がテン・ランと呼ばれる落葉樹林帯に入ったところでトラの足跡があった。その近くにウワデーンと呼ばれるちょっと赤っぽい大型の牛の足跡もあった。フーンさんはどちらも子供連れだといった。私たちはどうしてそんなことがわかるのか不思議だったが、そこに立ち止るとぷーんと死臭が漂ってきた。トラの母親が子供に狩りを教えるときは、被害者を一気に噛み殺さず、子供に止めを刺させるという。被害者は大変な苦痛にさいなまれるという。ここでもそんな悲劇が起こったのだろうか。帰路に着くころから少し雨が降り出した。夕食のときフーンさんはここに泊りがけで来た外国人は私たちが初めてだといった。世界遺産のフーウィカーケーンに泊まるためには森林局の許可がいるのだが、管理事務所のある北側が一般的で、フーウィメーディーは簡単に許可が下りないそうだ。シリボンさんとフーンさんの尽力のおかげだと思う。暗くなってから森の中にある人工の又タ場に案内してもらった。残念なことに動物には出くわさなかったが、又タ場には今までいたと思えるシカの足跡が残っていた。ここで、ゴメさんがフラッシュ型の体長 1 cm ほどのホタルを捕まえてくれたが、私の不注意で逃がしてしまった。しかし、宿泊所の周りでマドボタルのオスを一匹捕まえた。いつもは 10 時に電気が消えるのだが、私たちが来ているというので消灯は 12 時になっていた。しかし私たちは水浴びを済ませると早く寝てしまった。

8月23日

早朝、探鳥をした。声の割にはなかなか鳥の姿が見えなかったが、どこからかウィツウィツと空を切る音が聞こえてきた。私は皆と離れてサイの落ちた実を捜していたのだが、見上げるとサイチョウが 7 羽飛んで行った。シワコブサイチョウ (Wreathed Hornbill) だった。雄大な飛翔である。後で聞いたところによれば先に 2 羽飛んで行ったので全部で 9 羽いたというが、音がするなりフーンさんが家屋より飛び出してきて、皆に教えてくれたという。また、カワリクマタカの若鳥がピーピー鳴きながら近くまで来た。フーンさんの話ではもうここに 2 か月ほどいるという。まだ餌取りが下手で、この前リスをつかんだまではよ

かったが、逆にリスに足を噛まれて、まだびっこをひいているらしい。食後はフーンさんが整備したというトレールに入った。まず、昨夜の又タ場にいて塩をまいた。



私たちがここに来たことに敬意を表してフーンさんが私達にやらしてくれたのだ。塩まきは2ヶ月に1回ほどの割ですという。動物の中には保護区の範囲を越えて、人家近くの又タ場に行き撃たれることがあるので、こうして人工の又タ場を作っているという。タノン・トンチャイ山脈は、雨期にヤマビルがひどいというが、ここは高度が360メートルほどしかなくヤマビルがいないという。カオヤイなんかではこの季節ちょっと森の中に入ろうならたちまち足にまとわりついてくるのだが、ここは快適である。川辺でフーンさんはバックコートと呼ばれているシダを摘んでいた。



今晚の私たちのおかずにするという。ここでもフーンさんにいろいろ薬草などについて説明を受けた。ナンバンギセルのような花があったのが印象的だった。2時間ほどトレールで時間を過ごした後、特別のプログラムが待っていた。本来なら許可が下りないのだが、フーンさんの計らいと所長のブンナートさんの裁断があったと思う。私たちはアドンさんの運転で昨日の道を辿った。道は何ヶ所も沢があり、その部分は丸木が何本か渡してあるだけだが、アドンさんは慎重に

その橋を渡って行った。昨日も来た。ちょうど森の景観が変わるところから、右側にある川に下りた。まずは昼食で、持って行ったご飯を草地に広げて食べた。



私達はどこへ行くのか知らなかった。川の中に入るが、大丈夫かとフーンさんが聞くので、皆に言うと全員OKと返事があった。私は目の前の川を渡渉してどこかへ行くのだろうと思っていたが、その川がルートになった。メーディー・ノーイ川と呼んでいるそうだ。川は深くはないが、流れが少し急で、川底は砂地だがときたまヌルヌルした石があった。さっそく緑色の金属光沢のカワトンボにみとれていたポンティップが足を滑らして、川底にしりもちをついてしまった。靴に砂が入り込んでくるので歩きにくかったが、思わぬルートに今回はなかなかワイルドだと皆、心は弾んでいた。



私たちは川を歩いたり、川岸の獣道を歩いた。川岸は砂地になっていたり、小さな砂州があった。そこにはいろんな動物の足跡があった。クジャクの足跡があった。クマの足跡があった。ゾウ、インドヤギウ（クラティン）、トラ、カワウソ・・・。



けっこう歩いたなと思ったところ、川が向かって左に曲がりこんでいるところがヌタ場になっているという。右には土状のがけがあったが、そこに何条か細い溝が掘られていた。フーンさんの話ではゾウの牙の跡だという。ゾウがここの土を削り取って食べているのだ。フーンさんが目的地はこの奥にあるという。そこには大きなヌタ場があるらしい。上部に上がっていくと竹が密生していて、あちこちに獣道が走り、ぷーんと獣のにおいが鼻を衝く。しばらく歩くと山中の広い開けたところに出た。そこがヌタ場だった。何も見えなかったが、繁みでこちらを見ていたものがいたのだ。



私達がヌタ場を歩き出すと大きな叫び声が聞こえ、竹を折って逃げていく音がはっきり聞こえた。フーンさんがあれがインドヤギウダという。ポンティップは2頭の黒い塊が繁みに消えていくのを見たらしい。雲行きが怪しくなってきたが、競技場ぐらいの広さがあると思えるヌタ場を歩いた。モモアカヒメハヤブサ（Collared Falcon）がずっと高いこずえの先にとまっていた。また、ヨコジマオナガバト（Barred Cuckoo-Dove）も見た。強い雨が急に降り出した。たちまち私たちはびしょ濡れになった。川に戻る小さなヌタ場の辺りは粘土がヌルヌルになっていた。帰路は同じルートを辿ったが、フーンさんは陸路を多く歩いているようだった。しばらくして雨は小降りになったが、川が増水すれば危険なこともありうると思った。突然前方から「ナーク（カワウソ）がいる。」とフーンさんの声川辺の背の高い草の間から水に潜る寸前の黒い塊が見えた。宿泊地に帰ってから水を浴び、さっぱりした。夕食にはパケットがでた。かぼちゃのつまもでた。

その席でフーンさんが特に帰路、雨の中、ゾウやトラに出くわさないか心配したという。繁みの向こうでトラが餌を食べていることだって十分考えられるという。私たちは暢気なもので本当に何も考えていなかった。

た。フーンさんは雨が降らなかったらヌタ場に潜んで、動物を観察しようと考えていたらしい。フーンさんは長いフーワーカーケーンでの生活のいろいろな体験を語ってくれた。私たちが興味があったのはゾウにであった時どうするかということだった。昨夜も語ってくれたのだが、フーンさんの持論はちょっと高いところ（精神的に）から動物に思いやりをかけて話してやればたいていの動物はいうことを聞くというものだった。その例としてゾウやトラでの経験を話してくれたが、むしろ私たちがそんなことできるわけがない。それで、森を歩いていてもっとも出会う可能性のあるゾウについて知りたかった。フーンさんが言うには距離があればこちらから身を引けばいいが、ゾウが迫ってきたら横に逃げるのがポイントだという。



宿泊所に帰ってから、ゴミさん、ゴメさんとTJクラブについて話した。今回もラージャバット・プラナコーンの先生は来なかったが、これからどうしていくかというものだった。日本側はバーンライに落ち着いて活動をしたいと考えているが、タイ側の先生はそうしたいとは思っていない。名案は出なかったが、双方できちっと話すより方法がないだろう。

8月24日

朝は探鳥する。昨日のようにサイチョウが飛ばないかと思ったがどうもダメだった。しかし、コウハシシヨウビン（Stork-billed Kingfisher）がきれいに見えた。





いるのは分かっていたのだが、今回は池の畔から突き出た竹の枝に長い間とまっていた。今日は午後1時からパンダキャンプでバーンライの学校の先生に日本の3人が簡単な理科教室を開くことになっている。事務所の前でフーンさん、ブンナートさんと一緒に記念写真を撮る。来年はカオバンダーイへ行けたらいいなと話しながら別れる。



途中でカレンの集落により、去年買えなかった織物を買う。ポンティープはマフラーを一つ買った。

パンダキャンプに戻ったのは12時近かった。シリボンさんは今日来るというナレスワン大学の教育学部の学生70人ほどのためにテントの設営に忙しそうだった。昼食をとってから、簡単な打ち合わせをする。3人はすでに大半の準備をしてきているので、私はキーになりそうな言葉を選んでタイ語に直しておいた。1時には20人ほどの先生が集まってきた。生徒も何人か来ていた。木炭とアルミ箔と塩水を使った乾電池、去年のものを改変した顕微鏡、段ボール箱を使った空気砲、ストローを使った楽器等、みんなでむっつの項目を説明した。先生方は非常に興味を持たれたようで、どの項目も自分で実験されていた。3時すぎに一段落した。ゴミさん、武藤さんとパンダキャンプの

敷地をうろうろしていたら、シリボンさんが少し周りを案内したいと言い出した。それで車に乗ると例の修道院へ連れて行ってくれた。ゴミさんも私ももう3度も行っているので行ってみたいとは思わなかったが初めての武藤さんにはよかったみたいだった。パンダキャンプに戻るとゴミさんとポンティープが今日のナレスワン大学の学生に使う名札を作っていたので、私たちも手伝う。しばらくして学生がそろそろやってきた。夕方に小学生の演じるラオ・ヴィエンの踊りがあるという。シリボンさんはそれを見て帰れという。暗くなるころに踊りは始まったが、あまりゆっくりするとバンコクに着くのが遅くなるので7時過ぎに腰を上げた。プラナコーンに着いたのは10時過ぎで、シリワット先生が迎えてくださった。(終)



■ 活動案内 ■

『第 13 回 NPO法人 自然文化誌研究会 通常総会』のご案内

2004 年に東京都の認証を受けてから、第 13 回目の総会を行います。正会員の皆様はぜひご出席ください。また出欠を同封のハガキでお知らせ下さい。このハガキは欠席の場合は委任状となっております。ご意見などもお気軽にお寄せください。なお、正会員以外の会員の皆様もオブザーバー参加が可能です。

日時:2017 年 2 月 18 日(土) 15:00 開始～16:30 終了予定

場所:小菅村 植物と人々の博物館(小菅村中央公民館)

* 自家用車でお越しいただくか、JR 奥多摩駅から西東京バス「小菅行き」に乗り、「小菅村役場前」で下車。

* 詳細は事務局まで電話かメールにてお尋ね下さい。

議題: ①2016 年活動報告 ②2016 年収支報告 ③2017 年活動計画

④2017 年収支予算 ⑤役員の改選 ⑥その他 よろしく願いいたします。

正会員の皆さまには、出欠・委任状のハガキを送らせていただきました。
出欠席をぜひ、事務局まで教えてくださいませ！！

その 1「冒険学校 まふゆのキャンプ」 12.23～25(2泊3日)

毎年恒例の冒険学校「まふゆのキャンプ」を体験して、暖かいお正月を迎えませんか？

小菅村ではお正月の準備がもうはじまる頃です。日中は、村内を自由に動き、村の中でもちょっと面白いところに行きましょう。焚火・薪割り・ナイトハイク・星空観察・バードウォッチング・アウトドア料理・滝探検・・・その場で思いつく限り、いっぱい遊んで、食べて、寝る。そんなキャンプです。個性あふれるスタッフがみなさんの参加を待ってます。

日 程：12 月 23 日(金)～25 日(日)

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

宿 泊：テントまたは野宿またはログハウス

対 象：小学校 3 年生～中学校 3 年生

定 員：20 名先着順です。

参加費：会員 ¥22,000 非会員 ¥24,000

(奥多摩駅からの交通費・食費・宿泊費・保険代などが含む)

申込み：ハガキ・もしくは E-mail に住所・氏名・年齢(学年)・性別・電話番号を記入の上、12 月 16 日(金)までに事務局まで参加をお伝えください。



常に火とともに生活する 2 泊 3 日です！！

ぎりぎりまで、参加申し込みをお待ちしています！！

その2 第39回環境学習セミナー**4.15~16****シンポジウム 「(仮) 農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」****(現代文明の移行と伝統知・生業)**

趣旨： 日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には、現代的な課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに保全されていることが明らかになってきている。

自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考える機会は極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。本事業では、3 年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきた。

本シンポジウムでは、事業成果の報告とともに、社会的に成果を位置づけるために基調講演と他の先進事例紹介を行い、農山村と都市からの参加者ともに、生活における伝統知や技能の大切さとその継承による、健全なライフスタイルについて幅広く話し合いたい。

幸いなことに、開催地藤野は日本のトランジション・タウン活動の中心であり、シュタイナー学校やパーマカルチャー・センターもある。素のままの美しい暮らし (sobibo) へとライフスタイルを変容するために学ぶための良い実践が蓄積されている。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを明るく直観できるような統合概念をともに発見し合いたい。

日時：2017 年 4 月 15～16 日 (土日) 1 泊 2 日、日帰り
 場所：神奈川県相模原市緑区、藤野地区の「篠原の里」ほか
 参加者数：約 100 人
 宿泊：「篠原の里」40 人ほか
 参加費：参加資料代など 一般 1,500 円 学生 500 円
 ※ 食費・宿泊費・懇親会費等は別途。
 主催：自然文化誌研究会、ECOPLUS
 共催：エコミュージアム日本村 (トランジション小菅) / ミューゼス研究会、トランジション・タウン藤野、トランジション・ジャパン
 協力：東京学芸大学環境教育研究センター
 後援：小菅村、農業生産法人藤野倶楽部、ほか
 助成：「緑と水の森林ファンド」事業 (国土緑化推進機構)

内容：
 4 月 15 日 (土)
 9:30 受付開始
 10:00 開会の挨拶 自然文化誌研究会代表理事 中込卓男
 10:10 基調講演 高野孝子さん (早稲田大学教授・NPO 法人 ECOPLUS 代表理事)
 10:40 伝統知研究会報告 大前純一さん (NPO 法人 ECOPLUS 事務局長・新潟県南魚沼)
 黒澤友彦 (自然文化誌研究会事務局長・山梨県小菅村)
 11:40 昼食・ポスターセッション
 13:00 話題提供
 設楽清和さん (パーマカルチャー・センター代表)
 高橋靖典さん (トランジション・タウン藤野、藤野倶楽部)
 渡辺隆一さん (信州大学特任教授)
 14:45 座談会風の総合討論
 17:30 交流会・懇親会
 4 月 16 日 (日)
 9:00 シンポジウムのまとめと藤野まち歩きを紹介
 10:00 藤野まち歩き (2 コースを予定)
 12:00 解散・希望者は昼食

※本会のホームページや、次号会報ナマステ 127 号にて詳細をご案内します。このシンポジウムは、本会と NPO 法人 ECOPLUS が 5 年間に渡り (実際はもっと長く)、調査・研究・実践してきた、「伝統知」に関するシンポジウムです。

『藤農便り』 第 7 号

農業生産法人 藤野倶楽部 援農ボランティア

宮本 透（自然文化誌研究会）

藤野では冬の訪れが感じられるようになり、木々の落ち葉が舞う季節になりました。今年の秋は雨が多く、夏の終わりに種を播いた葉物野菜はうまく育ちませんでした。百笑マルシェに並べる野菜が少なく苦労しましたが、ようやくキャベツやハクサイの収穫が始まりました。今回は 30 年にわたる賃金労働者の生活に終止符を打ち、独立して農業を生業にする決心をした報告です。

・藤野倶楽部退社

藤野倶楽部では番頭を務めていましたが、仕事は多岐にわたり事務処理や業務管理が苦手な私には荷の重過ぎる職務でした。夏は特に多忙で昼間は宿泊後の掃除・洗濯や農園の草取りに追われ、事務仕事するのは夜になります。早朝より農園で野菜を収穫・出荷、日没後に会社に戻ってパソコンを開き帰宅するのは夜遅く、疲れて作業着のまま寝てしまうという日々が続きました。週 7 日畑に出て雑草が生い茂るばかりで秋作の準備は進まず、特に掃除・洗濯は負担で事務仕事にもミスが目立つようになり、イラついて仕事の愚痴がいついつい出るようになってしまいます。8 月下旬、このまま全ての業務を続けるのは無理と思い、社長に「番頭は務まりません。正社員の給料はいらないのでアルバイトとして、農園業務に専念させてください」と頼みました。

9 月より番頭職を解いてもらいましたが、会社としての仕事は農園業務だけというわけにはいきませんでした。この時期電通新入社員で過労自殺に追い込まれた高橋まつりさんの報道がありましたが、他人事には思いませんでした。10 月 12 日、社長と農園以外の仕事について話し合いましたが、「続けるのか辞めるのか腹を決めろ。よく考えて明日の夕方返事をもってこい」と言われました。藤野倶楽部の仕事は遣り甲斐を感じて情熱を持ってこなしてきたつもりでしたが希望した農園業務のみのアルバイトにはならず、自分の能力ではこれ以上社員を続けることはできないと心を決めました。社長には「10 月 20 日付で退社します」と伝えました。

・失業と就農準備

10 月 21 日に失業者になりました。会社からの離職票を受け取り、ハローワーク相模原で失業認定の手続きを行いました。帰り道、「日の丸・君が代」強制との闘いから始まった教育労働者、髄膜炎で生死の境をさまよい、心を病んで強制措置入院、家庭崩壊で一人暮らし、教員免許失効で失職・転職、最後は失業と我ながら 30 年間の賃金労働者生活は波乱万丈だったと思わず苦笑してしまいました。

藤野倶楽部を思いがけず辞める事になりましたが、農園ではようやく育った秋野菜の収穫が始まり温室では冬から春に収穫する野菜の

育苗真最中です。途中で投げ出すのは忍びなく、社長にお願いし援農ボランティアとしてしばらく農作業を続けさせてもらうことにしました。藤野倶楽部の援農ボランティアは私が受け入れ担当をしていますが、謝礼として昼食とやまなみ温泉入館券をお渡ししています。実際に体験してみると、農作業が終わった直後に土まみれの体を洗い流してゆったり温泉につかるのは至福の限りです。常時受付しておりますので、希望される方は藤野倶楽部へお申し込みください。

11 月 9 日、農業委員会を就農相談に訪ねました。「佐野川でお茶畑を借りてお茶農家になりたい」と話すと、農協の営農経済課に紹介してくださいました。農業委員会・農協の尽力で和田地区の農地を借りられることになり、地主さんと借用契約を交わすことができました。当面は兼業でしょうが、2017 年 1 月 1 日から認定農家としての新しい生活が始まります。2014 年 9 月にあった秦野市公民館の手もみ茶講習会、講師の高梨さんの農業高校卒業以来極めた姿に感動し、茶栽培をしたいという夢を持って藤野に移住したのです。茶畑の再生から始める道は険しいですが夢の実現に向け、品質の高い足柄茶を生産できるよう精進します。

・自給農耕ゼミ第 7 回・8 回

6 月に播種した雑穀ですが、10 月 23 日に収穫、11 月 27 日に脱穀と連続で自給農耕ゼミを開催しました。十分な管理ができずアワ・ヒエ・シコクビエはほとんどスズメの餌になってしまいましたが、モロコシやハトムギはある程度の収穫ができました。ゼミを通して藤野周辺で雑穀栽培に取り組む人たちとの交流が深まったことはとてもよかったと思います。「駅前畑は来年も自給農耕ゼミで雑穀栽培してもよいですよ」と社長は言ってくださいました。私も駆け出しですがプロ農家になり、新規就農者認定申請の営農計画書には雑穀栽培を記載しました。来年は作付け計画をしっかり立て、スズメに食べられないようきちんとネットをかけて収穫を迎えたいと思います。藤野駅前の雑穀栽培は自分の仕事として取り組みますので、来年も自給農耕ゼミよろしくお付き合いください。



アワの収穫

＜お知らせ＞ 藤野倶楽部は今年も INCH 賛助会員です。INCH 会員への特典として、ナマステ今号を持参された方には「百笑の台所」の食事料金を 10%割引いたします。アクセスは藤野倶楽部の HP をご覧ください。

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.7 その9

『冒険探検粉塵記 第9話 環境教育研究センターの創業のころ』

駄作者 文福洞先斗

自然文化誌研究会の皆さんの協力を得て、人知れず縁の下の作業員である事務局（企画調整）担当として、日本の環境教育学を創業したのはポンちゃんである。もちろん、世間向けに会長は偉い方々になるものだ。始まりは40年以上も前のことである。しかし、引退して3年ほどたつが、いまだに数多くの環境・教育課題が解決していないばかりか、さらに深刻化しているにもかかわらず、環境・教育を学ぶ意味が深く探求されなかったことに、とても無念を感じている。意味・信念あるいは思想・信条がなければ、人の行動は浮動し続ける。外見流行と内面不易を対比させて、環境・教育関連の教育・研究組織の創業、環境教育推進法の成立の顛末を、個人史的事実として記録しておきたい。

環境教育研究センター（現在の名称）の創業にあたって、第8話で述べた環境教育学会づくりは戦略的な必要性によるもので、第二義的であり、本来、第一の意義は新たな学問、環境教育学の構築であった。農業教育は不要との中央政府の政策により、当時の文部省教育大学室長から附属農場（学則、学内措置）廃止の強い行政指導があった。学内からも、駐車場、サッカー場、第2附属高校、小金井市からは廃棄物処理場にせよとの提案が続いてきた。農業関係の諸先輩にも助力を求めたが、彼らも農業技術や行政に携わる人たちで、農業教育の必要性を認めてくれなかった。いまだに、林業関係者に比べると、農業関係者は一般教育としての農林業に冷淡だ。孤立無援であった。

そこで、農業学習を主要な基礎とする環境教育学の構築へと発想を変えざるを得なかった。農場を守るために、環境教育施設に改組する概算要求を続けた。この過程で、高本文雄先生ほか多くの方々の助力を得て、改組は認められ、附属野外教育実習施設（文部省令）が創立できた。文部省側は「環境教育実習施設」を認めず、名称を「自然教育実習施設」にするように指示してきた。抵抗の結果の妥協点が「野外教育実習施設」の名称である。その後、さらに改組拡充の概算要求を続けて、「環境教育実践施設」になった。この間、他大学では、農場から「〇〇環境教育センター」への改組が続いた。教育学部農学関係の先輩方からは、けしからんと言われていたが、結果的には他大学にも波及して全国で数か所の農場を環境教育センターへの改組の方向で守ったことになり、後に「君は良くやった」とお礼を言ってくださる方も少しはあった。現在では、多くの学生、生徒、教職員、市民が彩色園（農園）を活用してくださり、人知れず満足している。



夏 田んぼ、クワイもある。



冬の彩色園

閑話休題して、もう一つ、「環境教育推進法」のことを記録しておきたい。せっかく、日本環境教育学会も創立し、2000 名の会員を迎えたが、ポンチャンは 20000 人の会員を獲得して、日本医師会ほどの影響力を持たないと、日本の環境問題を解決に導き、「受験体制」教育の在り方を良い方向に変えられないと考えていた。でも、そのようには発展しなかった。ポンチャンは学会の運営から外れて、第一義的に重要な環境教育学の核心である「環境学習原論」の構築に専念していた。そこで、第三義的な戦略として、環境教育推進法をアメリカに習い日本でも制定して、環境教育の発展を期すことにした。環境文明 21 の藤村コノエさんに助力を求め、一緒に国会議員に請願するロビー活動をした。学習会やシンポジウムに多くの国会議員も参加してくださり、超党派で議員立法されることになった。参議院本会議の議決まで傍聴に行き、3 名の反対があったが圧倒的多数で法案は成立した。NPO による提案が議員立法されるのは、民主主義のもっともな道筋だ。

ここに至るまでに、日本環境教育学会の運営委員会に、すでに 1 会員に過ぎなかったにもかかわらず、呼び出されて、「環境教育は法になじまない。怪しからん考えだ。」などと、お説教を受けた。しかし、成立してしまえば、そのような意見は忘れ去られ、お説教なされたご本人たちも、自分たちの成果のようにふるまい、活用せよとばかりに変節してしまった。ポンチャンは最初の提案者で、このことは文部科学省や環境省の有力者も知っていたはずだ。したがって、具体的に運用する委員会に呼ばれ、とても忙しくなることを恐れたが、まったくお呼びはなく、提案者の趣旨は黙殺された。第一義、学者として暮らすポンチャンには、自分の時間を失わずに済んだので、結果良しなのだが、とても不条理を感じた。環境省が閣法として提案できずにいたので、渡りに船と議員立法に乗り移り、換骨奪胎しようとしたのだろう。

この様に、現場で自ら働き、かなりの仕事を成したと自負しているが、現実には黙殺されてしまった。民主主義の時代で、暗殺こそされなかったもので、それでも良しとせねばなるまい。自己の名利を言いつのり、売り込まないので、仕事量の割にはあまりに無名である。それで構わない信条ではあるが、せっかくの成果が正当な評価を得ず、趣旨が普及していないことのみがまことに悔しい。しかし、無名は無力に等しいこの国の先行きが悲しい。



春 環境教育研究センター表入口には桜が咲く。

高校生のころ読んだ小説「形」（菊池寛）にあるように、人は形によって惑わされ、他者を品定めする。見た目の服装で人品は判断される。名刺を出せば、所属と肩書でのみ、これまた能力まで判断される。もちろん、確かに経験的に言えば、当たっている部分も多いのだろう。いわゆる就職活動の大学生が黒のリクルート・スーツで身を包み、若者が個性を埋没するのは気味が悪い。若者の個性的な服装を委縮させる会社の面接であってよいのだろうか。社会人になり、形や肩書が必ずしも全人的に的確な評価を与えないことを感じ、人間は中身だと自覚した頃から、ポンチャンは着心地の良い服装（カジュアル、決してラフではない）をするようになった。

ポンチャンは前世ではよほど悪人であったのだろうか、現世では、すでに子供の頃から、名利を求めず、人知れずとも社会奉仕をすると決心していた。しかし、この世では、名利を求めて多くの人びとは集まるので、提案者に名利がないと何かを成そうとしても協力は得られず、実現するには至らない。良い考えも行為も広げることにはできない。一方、名利を得て目的が実現に向かい、たとえ達成しても、その過程で名利に溺れて依存したら、墮落する。得られた良い成果は望まない現状維持に取り込まれてしまい、本質が骨抜きになる。この様な文を書いていること自体も、露悪的に言えば、ポンチャンも裏に名利を求め、隠しもつ二律背反である。貧乏、非力の色男、ポンチャンは、確かに高本文雄先生の名声を借りなければ、これらの仕事を成し遂げることではできなかった。官僚や政治家など関係者の与論を作り、市民・世間に向けて世論を醸すのが戦術だった。権力・権威の力がなければ、この国でも実現できないことが多い。現場に出ない人々はきれいごとを言う。こだわりもなく、節操もなく、主張を軽く翻す。現場は泥沼であるが、その中で蓮の花は咲くのだ。実に、環境教育や Eco は世に認められるようになると、次第に名利を求めて悪用され、良識でも正義でもない目的にそぐわない虚偽の部分が拡大してきた。この行為は既成の権力や権威によるばかりでなく、それを非難する対抗側も類似の行為を意識的・無意識的にしている場合がある。考えなしの「正義」は意図した悪意よりも恐ろしいものだ。

環境教育実践施設は、やっと名称変更して、環境教育研究センターになった。国立大学が法人化されたので、名称は文部科学省令による必要がなくなったのだ。20 人規模の研究所にしたかったが、大学幹部からは「あんたは頭がおかしい」と一蹴された。家庭や地域社会、この国や地球規模であれ、環境のうえで暮らす私たちにとって環境・教育はもっとも基礎的な学習行動だ。不登校が 10 万人以上、自殺者が 3 万人前後、高い地位にある人や学歴ある人の犯罪も少なくない。教育関係者の猛省が必要だ。社会を改善するため、本気の「教育学原論」が必要だ。

(2016.11.24)



東京学芸大学の授業の風景。中央左の講師は、本会代表理事の中込卓男氏。

○ 今後の活動予定のお知らせ (2016 年 冬～2017 年春)

12/23-25 『冒険学校 まふゆのキャンプ』 @小菅村 2泊3日

2/18 第13回通常総会 @小菅村

4/15-16 『第39回環境学習セミナー (仮) 農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流
(現代文明の移行と伝統知・生業)』 @神奈川県 (旧) 藤野町 1泊2日 or 日帰り

4/29 『のびと講座 野草の天ぷらとお茶つみの会』 @東京学芸大学環境教育研究センター

5/3-5/5 『冒険学校 むらまつりキャンプ』 @小菅村 2泊3日

※ ログハウスづくり第4弾の「トイレ棟づくり」スタートしてます！興味ある方は、メーリングリストに登録しますので、事務局までご一報ください！！

○ 事務局より

●今年主催事業の環境学習セミナー等にて、山村の豊かさ～森林資源もエネルギーとして考えたりすることや、生業があることの豊かさ～生業による健康維持などを学べ、農山村に住んでいる自信を得られました！！ クロ

●中型自動二輪免許を無事に取得しました！！ とも言え、小菅村はすでに本格的な冬！ 路上デビューは雪解けを待ってからになりそうです！！はるこ

○ 事務局の麗しき日々

・ごめさんが遂に！！(好好) 爺になったもよう。

・翔くんの告白「僕は小菅に別荘を建てるよ！！」(続)

・(村里) ゆきちゃんが結婚したもよう、おめでとう！！

・だにえるは4月から正採用で働くもよう。

・せいじゅは相模湖畔でバイトをはじめたもよう。

・めぐちゃんは就職のため、茨城へ移住するもよう。

・キタショーが結婚したという情報を受信しました。

・みく(豊松本) が一人暮らしやら、彼女できたやらにぎやかなもよう。

・冒険探検部の現役学生はわずか3名になったもよう。

↑学園祭のシシカバ出店に佐伯さんは岐阜から駆けつけたもよう。

○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称 INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、30年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF 環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。

本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。会員には以下8つの種類があります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額(1～12月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員:10,000円 一般会員:5,000円

学生会員:3,000円 賛助会員(個人・団体):10,000円

家族会員:6,000円 特別維持会員:100,000円

植物と人々の博物館友の会会員:3,000円

小菅村特別会員:1口1,000円から

成合基金(冒険探検基金):「成合基金」と記載してください。

郵便振替口座:00100-2-665768

口座名:特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 126 号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日>2016年12月10日

<編集>自然文化誌研究会 事務局

<発行>特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL:0428-87-0165・090-3334-5328(事務局黒澤)

E-mail: npo-inch@wine.plala.or.jp

HP: <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>事務局ブログ: <http://npoinch.naturum.ne.jp/>

次回「ナマステ 127 号」は、3 月上旬の発行を予定しています。お楽しみに！！